

このように、水島らは、朝鮮住民の乳児死亡について、1) 0歳死亡率が1歳死亡率より低いこと、2) 農村住民の乳児死亡率は低い一方で京城の乳児死亡率は高率であること、3) 農村でも信頼し得る地域では乳児死亡が多いと推測されたこと、4) 満州の朝鮮人の乳児死亡率は高いこと、5) 正確性の増した1938(昭和13)年以降の人口動態統

計では乳児死亡率が急上昇したこと、など多面的な人口統計学上の根拠から、その正確性には問題があったと認識していた。またこの認識は、第二次大戦後においても人口学の専門家には共有されていた一方で、近年では事実を踏まえない批判もみられていた。

(平成28年3月例会)

## 書 評

### 大野肅英 著 『歯』

各県の歯科医師会には、資料室的なものを設けているところがあるが、神奈川県歯科医師会には「歯の博物館」が併設され、公開されている。この本は、平成23年2月～4月に、横浜開港記念館で「痛っ、歯が痛い、歯科医学の誕生と横浜」展が開催され、そこで展示された「歯の博物館」や著者らの所蔵品を見て、同時に行われた講演会を聞いた法政大学出版局の編集者が、本書の執筆を依頼したことから「ものと人間の文化史」シリーズの一冊として刊行された。

著者は、日本歯科大学卒業、母校の大学院を修了、学位を取得したのち、1970年から横浜市で矯正歯科医院を開業するかたわら、約40年間にわたり歯科に関する浮世絵、引札、古書、お歯黒道具、房楊枝などを蒐集し、その一部は「歯の博物館」にも出展されており、現在は同館の館長になっている。

この本は、これらの資料と数多くの参考文献に基づいて、第一章 歯が痛い、では歯痛に際しての平安時代から江戸時代までの口中医による治療の変遷。第二章 歯を抜く、では健康な歯を抜く風習のあった縄文から弥生時代に始まり、医療としての抜歯について、麻酔術とともに記載。第三章 お歯黒をする、ではお歯黒の歴史とその風習の変遷。第四章 歯をみがく、では歯みがきの起源と、歯ブラシや歯磨き粉の宣伝合戦など。第五

章 入れ歯をつくる、では日本独自の技術である木床義歯やそれを製作した入れ歯師。といった章に分けて記載されており、最後は、第六章 発展する歯科医学、と題して、幕末から明治維新にかけて横浜居留地で開業したアメリカ人歯科医により、それまでの口中医、入れ歯師たちに代わって、西欧の歯科医療技術が導入されたことから始まる日本の近代歯科医学史の概要が述べられている。なお第三章を除く章にはコラムとして西洋の歯科医療などに関するこぼれ話が、羽黒勇司氏によって書かれている。

巻頭には、10頁に及ぶカラー写真により、①「病草紙」に描かれている挿画、②鯖稻荷の絵馬、③小林清親「百面相 歯痛」、④歌川国芳「きたいなめい医 難病療治」前歯の抜歯、⑤渡邊華山「一掃百態」居合抜の抜歯、⑥シーボルトの抜歯器具、⑦上流階級のお歯黒道具、⑧庶民のお歯黒道具、⑨喜多川歌麿「婦人相学捨鉢 かねつけ」⑩小林清親「百面相 かねつけ」、⑪歌川芳員「新板勝手道具」明治期のお歯黒道具、⑫房楊枝(日本)、⑬さまざまな歯木(外国)、⑭歌川国貞「俳優日時計 辰の刻」房楊枝による歯みがき、⑮歌川豊国「絵本時世粧」房楊枝・歯みがき粉が並ぶ楊枝店、⑯江戸期の粋な小楊枝、⑰作者不明「肌鏡花の勝婦湯」入れ歯の引札が張ってある銭湯の壁、⑱入れ歯師の看板、⑲入れ歯師の制作風景、⑳象

牙の歯を植えた木床義歯，㉑ムシ歯予防デーのポスター」(昭和3年，日本歯科医師会)，㉒手書きのポスター(昭和15～16年)，㉓明治・大正期の診療室風景，が示されている。

この他にも，各章に多くの挿絵や写真などが収載されていて，視覚素材を用いたわが国の歯科医療の歴史を知ることができる，一般向けの貴重な本であると思われる。記述は江戸時代が中心になっているが，庶民の間に歯科保健医療が広く浸透していたことがわかり，また，それらが基礎になって，明治以降の歯科医療の進展が図られたことも読み取ることができる。ただ，戦後から現在に至る歯科医療を巡る制度や，治療・予防法，および歯科器械・材料などの変化については，ほと

んど触れておらず，今後の資料の収集・整理と分析が望まれる。

なお，この「ものと人間の文化史」シリーズは，「人間が〈もの〉とのかかわりを通じて営々と築いてきた暮らしの足跡を具体的に辿りつつ文化・文明の基礎を問いなおす。手造りの〈もの〉の記憶が失われ，〈もの〉離れが進行する危機の時代におくる豊饒な百科叢書。」と謳われて既に178冊が刊行されており，本書はその177冊目の本である。

(宮武 光吉)

[法政大学出版局，〒102-0071 東京都千代田区富士見2-17-1，TEL. 03 (5214) 5540，2016年11月，四六判，250頁，2,500円+税]

## 書籍紹介

ピエール・フォシャール 著，高山直秀 訳

# 『歯科外科医あるいは歯科概論』1728年版

ピエール・フォシャール(1678～1761)といっても，本学会の歯科関係者以外の多くの会員にとっては何のことかわからないのが実状であろう。ピエール・フォシャールは18世紀フランスの外科医であり，歯科専門で治療を行った。その事をもとに書かれたのが『歯科外科医あるいは歯科概論』で，フランス語で書かれ，1728年の初版，1746年の第2版，死後の1786年に第3版がパリで出版されている。ピエール・フォシャールは近代歯科医学の父と言われ，近代になってイギリス，アメリカで広く紹介された。このたび，その貴重な初版本が高山直秀氏により翻訳され，日本語で手軽に読めるようになった。高山直秀氏は千葉大学医学部出身の小児科医で，駒込病院の小児科部長を勤められ，フランスのストラスブール大学医学部に留学，また狂犬病研究でも著明な方である。このように高い語学力と広範な知識なしでは本書の翻訳は無理であったと思われる。

ピエール・フォシャールはブルターニュ地方に

生まれ，15歳の時に海軍外科軍医見習いとなり，18歳の時にアンジェで歯科専門の外科医として開業，名声を得たと言われている。41歳の時にはパリのコメディ・フランセーズ通りで開業し，50歳を超えてから『歯科外科医あるいは歯科概論』を出版した。歯科医療は従来秘伝であったが，歯科治療法を詳細に記述して一般に公開した。このために歯科医療が確立したと言われている。しかし残念ながらフランス本国におけるピエール・フォシャールの知名度は低く，むしろ1940年代アメリカのワインバーガーに賞賛されてから世界的に彼の知名度は広がっていく。

本書の構成は，ふたたびのFauchard邦訳(中原泉)が巻頭に記載され，目次，図版目次，凡例以後本文の邦訳に入り，ドタール閣下に捧ぐ，序文，賛辞，国王陛下の許可状，第1巻(第1章～第37章)，第2巻(第1章～第24章)，参考文献，訳者解説，フォシャール関連年表，訳者あとがきと続いている。第1巻は基礎編，第2巻は実践編